

特定非営利活動法人日本医学ジャーナリスト協会

第4回(2015 年度)「日本医学ジャーナリスト協会賞」

日本医学ジャーナリスト協会(水巻中正会長)は、質の高い医学・医療ジャーナリズムが日本に根付くことを願って、「日本医学ジャーナリスト協会賞」を 2012 年に創設。第4回目となる今年度も全国から多数のご推薦をいただきました。その中から、「オリジナリティー」「社会へのインパクト」「科学性」「表現力」を選考基準に、協会内に設けた選考委員会で慎重に審議した結果、2015 年度の受賞者として、次の方々を選ばせていただきましたので、お知らせいたします。

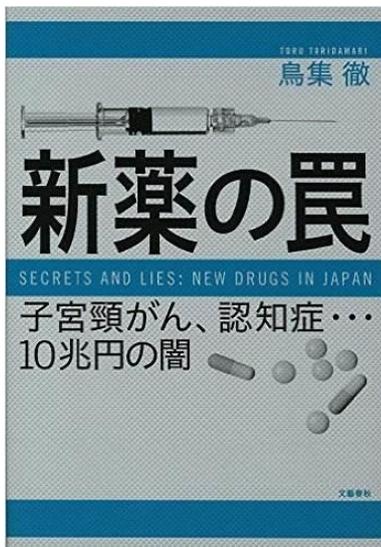
過去の受賞者、受賞作品、記念シンポジウムの模様については、<http://meja.jp/prize.htm> を。受賞者による 記念シンポジウム『ジャーナリズムがなすべきこと』を、11 月 6 日(金)、午後7時より、東京・内幸町の日本記者クラブ(日本プレスセンター9 階)で開催します。どなたでもご参加いただけます。

受賞理由は、以下の通りです。

【大賞】

◆書籍部門 鳥集 徹さん ジャーナリスト

『新薬の罫 子宮頸がん、認知症…10兆円の闇』(文藝春秋)



医療をめぐる頻発する一連の不幸な事件が「利益相反」と深い関係にあることは国境をこえた事実であり、海外では多くのジャーナリストがこの問題を追及してきました。

本書は、そのような状況を真正面から取り上げた本邦初のものであることが高く評価されました。

学会中枢部を抱え込んだ巧妙な宣伝、販売促進活動、医学界のみならず、政治家、患者団体もまきこむ周到な戦略が、抽象的ではなく、具体的な事実をもって語られています。

著者は、8年前に、インフルエンザの治療薬タミフルにまつわる利益相反をスクープし、これがきっかけになって、厚労省の審議会の委員は、審査対象となる薬等を販売する製薬会社から資金提供(寄附金や講演料、原稿料など)を受けているかいないかを申告し、「一定額以上だと審議や決議に参加できない」という、基本的なルールができました。

長期的な取材の延長線上で、生まれるべくして生まれた書籍であり、文章の切れ味も構成もよく、勇気あるジャーナリストによる、大賞にふさわしい作品と審査委員から賞賛されました。

◆映像部門 石原大史さん

『NHK ETV 特集・薬禍の歳月～サリドマイド事件 50 年～』

サリドマイドは「安全な睡眠剤」「妊婦のつわりにも効果がある」として販売されました。ところが、強い催奇形性のために手や足が極端に短かかったり、耳が聞こえないなどの障害をもつ約 300 人の被害児が誕生。日本の薬害の原点といわれます。

にもかかわらず、忘れられかけているこの問題を、50 年目という節目をとらえ、体験を丁寧に聞いていく中で、「薬害の影響は一生続く」という事実が伝えられました。

加齢によって新たに浮かびあがった内臓や骨の異常、無理な姿勢での自立生活の努力を続けたために引き起こされた二次障害です。



そのような障害に苦しむ女性の「薬害を繰り返してきた製薬会社や医療界、国の体質はそのまま残っている。だから、私たちはあの薬害を語っていかなければいけない」という言葉。生後間もなく乳児院の玄関に捨てられた男性(写真)の壮絶な人生……。

90分という長編、しかも、重い話題でありながら、見るものを最後まで惹きつける構成も高く評価されました。「放送文化基金賞」のドキュメンタリー部門で最優秀賞

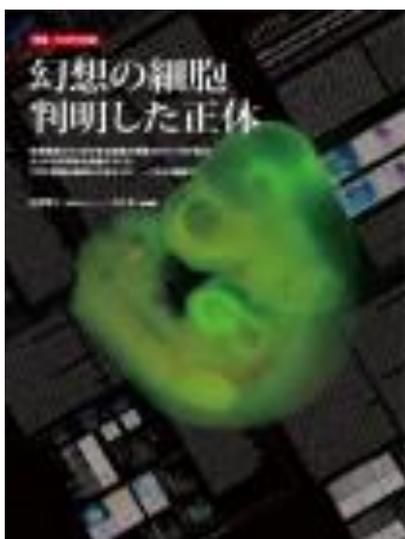
を受賞しておられますが、「放送文化としての評価だけでなく、医学ジャーナリズムとしてこそ、高く評価されるべき」という推薦者の言葉もあり、大賞となりました。

◆新聞・雑誌部門 古田彩さん、詫摩雅子さん

日経サイエンス「STAP細胞をめぐる一連の報道」

古田彩さん(日本経済新聞社科学技術部次長)

詫摩雅子さん(日本科学未来館科学コミュニケーション専門主任)



STAP細胞に関して新聞・テレビはおびただしく報道をしたものの、興味本位な周辺の報道が目立ちました。そのなかで、古田彩さんと詫摩雅子さんは、科学的証拠をもとに真相解明することに集中して真実を明らかにしました。

「日経サイエンス」2014年6月11日発行の号外「STAP細胞 元細胞の由来、論文と矛盾」では、独自に入手したSTAP細胞の遺伝子データ解析についての理化学研究所の内部資料に基づいて、STAP細胞が、実は既存の多能性細胞、ES細胞(胚性幹細胞)である可能性が高いことを報じました。8月号「STAP細胞の正体」ではこれを詳報、9月号「STAP幹細胞はどこから？」で、STAP細胞が、論文著者の小保方晴子氏が実験していた研究室で作成された既存のES細胞であった可能性をいち早く指摘。15年3月号では、判明した事実をもとに、STAP細胞が最初から存在しなかったことを解説しました。高度な取材力と分析力に裏打ちされた質の高い記事は、科学誌ならではの調査報道のあり方を示したものと高く評価されました。

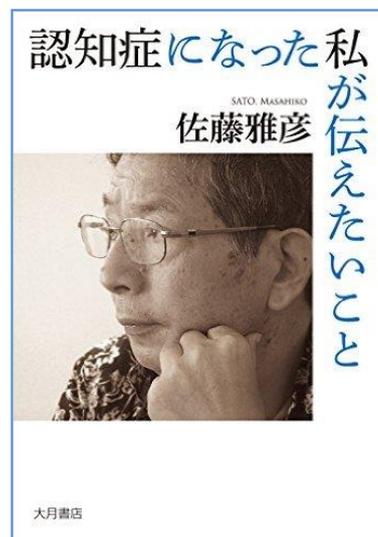
【優秀賞】

◇書籍部門 佐藤雅彦さん

『認知症になった私が伝えたいこと』

「認知症になっても暮らしやすい世の中を」という強い意志に貫かれ、認知症になった人にしか書けない経験と工夫と、社会への強くて具体的なメッセージが込められています。

中学校の数学教師を経てシステムエンジニアとして活躍していた45歳のころ、仕事にミスが増える異変を感じ、51歳で若年性認知症と診断されました。ショックと苦しい混迷の年月を経て、記憶力の低下を補うためのパソコンや携帯電話やipadなどを使った智恵を編みだしました。それだけでなく、生きるための哲学が本書につまっております。あとに続く人々に伝えようとする思いに貫かれています。



講演やフェイスブックで社会への発信を続け、認知症と生きる人による「3つの会」や「日本認知症ワーキンググループ」を発足させた佐藤さんたちの歩みは、そのまま、日本での認知症当事者運動の歩みの記録ともなっています。

出版後1年もたたないうちに台湾で翻訳出版されたことは、本書に込められた知恵が、高齢化の進むアジアの国々にも貢献することを示しています。

◇書籍部門 樋口直美さん

『私の脳で起こったこと—レビー小体型認知症からの復活』

レビー小体病の当事者である樋口直美さんが自らの日記を公開するというユニークな手法で丁寧につくられた作品。本人にしか書けない、これまでの常識を覆す認知症像が繰り広げられています。

推薦者の医師はこう述べています。

「私は 30 年近く医学を学び、精神科医療の現場で働いてきました。この本で語られている壮絶な体験は、私が慣れ親しんできた三人称で記述された「医学的な症状」が、一人称の現実となったとき、「感情も思考もある一人の人間の症状」となった現実です。私を打ちのめしたのは、この三人称の医療と一人称の医療のあまりに大きな落差でした。大きな衝撃を受けながらも本を読み進めると、三人称の医療を一人称の医療に変えるにはどうすればいいか、貴重な示唆が得られます」。

この本は、「レビー小体型認知症」と診断された当事者の思い、経験を赤裸々に記述したという以上に、これからの医療の本質を変えていくための貴重な道筋を示している、という点も高く評価されました。



◇映像部門 川畑恵美子さん (TBS 報道局記者)

報道特集「精子提供・出自を知る権利、そして、新しい家族像をめぐる一連の番組」



精子提供で生まれたDI児は、日本に1万人とも2万人とも言われています。しかし、これまでは親と医療者の視点でしか語られませんでした。それを、子供の視点から問い直そうとした点が画期的です。

ただ、取材を進めていくうちに、親の葛藤や提供者の葛藤もあることを知り、2年にわたる4回のシリーズで、立場の違う当事者たちを国内外で取材し、複眼的にこの問題を捉えています。最後は同性カップルが家族を持つことの是非にまで踏み込みました。

人工授精を不妊カップルの問題とだけとらえるのではなく、「家族とは何なのか？」という、誰にでも関わる普遍的なテーマに発展させたところが意欲的です。

「自分はどこから来たのか—精子提供で生まれた子供の葛藤」を実名で顔も出して取材する挑戦から発展し、出自を知る権利の是非、生殖技術を社会がどこまで許容できるのかを考えるきっかけをつくったといえます。

テレビ報道は、顔なし、モザイクが常態化していますが、登場人物と辛抱強く信頼感を築き、視聴者に真に信頼される、顔を出しての基本を貫いた姿勢も、映像部門のあるべき姿として評価されました。